

エリヤという預言者は旧約聖書の中でも殊に著名な人物として通っています。もちろん架空の人物ですし、彼が活躍したと記される北イスラエル王国も実在した可能性はまずありません。先週も話したように、旧約はバビロン捕囚期を通じてそれ以降に編集されてゆきました。そのモチーフは捕囚下の人々を慰め・励まし・希望を与えることなのです。そのため共同体に共通の「過去」を創り出して「共有化」を計りました。この共有化の過程を信仰というのです。そのための共通の過去とはドラマなのです。しかし、このドラマ性が大切なのです。そこには誰にでも分かり易く「存在の意味」が繰り返し問われて行くのです。捕囚下に置かれていたがゆえに、「生産」を追い求める人間理解ではなく、「わたしは誰に所属し、誰と共に生きて行こうとしているのか」という「存在」を求める個性的な自己理解を獲得して行ったのです。

実はエリヤ物語とは21章から始まるのです。そこには「ナボトのぶどう畑」事件が記されます。アハブ王の横暴により農民ナボトが殺されて彼の畑が王に奪われた事件です。それをエリヤは糾弾したのです。その糾弾が17章1節に始まる「干ばつの預言」です。結果、エリヤは野に下り追われる身になってしまいます。その日の食べ物にも事欠く有り様が4節以下に綴られてゆきます。

「烏」(からす)に養われるエリヤの姿です。烏とは農民のことです。権力に対峙して一人の農民のためにすべてを投げ打ったエリヤに対して、ナボトと同じ農民たちが支援を言い続けたというのです。

ここで宣言されるのは預言者像の確立なのです。預言者とは権力と対決する者であり、その預言者を受け入れる人々とは権力から最も遠く離れた人々であり、これこそ神がかえりみられる人々であるのだということをバビロン捕囚下にあって困苦する人々に語って聞かせたのでしよう。

続け様に本日の箇所である8節以下の物語が付加されてゆきます。ここでは「烏の養い」で受け身だったエリヤが能動的に働いてサレプタの女性の家族のみならず、息子の命まで救うという記事が記されます。特に「壺の粉と瓶の油」とは必要最低限のライフラインです。

サレプタ、つまり異邦人だったこの女性には「権力から最も遠く離れた人々」以下の評価しか与えられていなかったものと考えられます。しかし、エリヤはまさに「そのひとり」と出会います。彼女の生活の哀しみ、愛する者の喪失の嘆きの中にこそ捕囚下にある人々の姿が浮き彫りにされてゆくのです。神は過去にもこのように憐れみをもってサレプタの女性を支えられたように、今、捕囚下にあるわたしたちにも恵みをもって希望を与えて下さるのであり、それは「壺の粉と瓶の油」

のように尽きることのない神の側からの一方的な約束であることの再確認作業なのです。

この物語の焼き直しは新約の中にもいくつも見受けられます。例えばマルコ7:24-37でイエスがエルサレムの権力と対決される前に、ティルスとシドンの異邦の地を巡られ、汚れた霊に取りつかれたギリシヤ人の女性の娘を癒す記事が描かれます。慰め・励まし・希望を望むことは人として神から授かった最低限であり、しかし同時に最大限の恵みであることが語られるのです。